丸山眞男研究プロジェクト中間シンポジウム

# 丸山眞男とアメリカ文化の交錯

油井　大三郎

## I　はじめに

アメリカ人は報告をするにあたってユーモアで始め、日本人は報告するにあたって弁解で始めるという（会場：笑）、この文句は丸山さんのものではなかったでしょうか？（笑）しかし、私はアメリカ合衆国（以下アメリカと略）を研究していますが、日本人なので、弁解から（会場：笑）始めさせて頂きます。

私は、本学でアメリカの歴史や日米比較文化論を担当しておりますが、丸山思想の専門家ではないので、かなりにわか勉強で、アメリカと丸山さんの関係を報告させて頂くことになりました。また、今、司会の方からご紹介頂いたように、私は東大の本郷キャンパスには行かないで、駒場キャンパスにあった教養学科というところに進学しましたので、直接丸山さんから教わる機会はありませんでした。そのため「丸山先生」と呼ぶのは憚られるし、かといって呼び捨てにするには思想的に非常に影響を受けていますので、今日は「さん」付けで報告させて頂きます。

丸山思想については、とくに亡くなられてからたくさんの本が出版されています。とても全部は読み切れませんでしたが、なかには丸山思想は日本が貧しくて、軍国主義の復活が危惧された時代の思想であって、豊かな日本になってからはあまり有効ではないという意見も出されていました。また、一九六〇年代の末に大学紛争があって、丸山さんそこで全共闘系の学生から糾弾を受けたことを根拠として、丸山さんのような「啓蒙的知識人」の役割は終わったという解釈もありました。しかし、私は、現在の「集団的自衛権」の問題とか憲法改悪の問題などを考えると、丸山さんの遺言はむしろこれからますます活かされなければいけない、と感じています。

しかし、丸山さんはウェーバーとかマルクスとかマンハイムというドイツの思想を基軸として日本の政治思想を鋭く切った思想家として知られていますので、アメリカとの関わりは比較的はっきりしていな

い面があるのではないかと思います。そこで、今回いろいろ調べた結果、三つの手掛かりがあると思うに至りました。一つは『思想の科学』という雑誌が終戦直後から出ていますが、この雑誌の中心にいた鶴見俊輔や鶴見和子、都留重人といった人々はアメリカ留学が長い知米派の知識人で、かれらが中心になって創った雑誌が『思想の科学』だったと思います。丸山さんは最初からそこに参加していたわけで、このような知米派知識人との交流のなかで、アメリカについて理解を深めていたという面が一つあります。

二つ目は、戦後、日本はアメリカを中心とした占領軍に占領された結果、アメリカの文化が大量に日本に流入してくるわけですが、そのうちの一つがアメリカ流の近代政治学というものだったと思います。この近代政治学と丸山さんの交流が第二の重要なポイントだと思います。

三つ目は、一九六〇年代の前半期に「近代化論」という、これもアメリカ発の近代史理解のモデルとの関係です。この理論では、明治維新以降、急速に工業化に成功した日本をむしろプラスのモデルとして、発展途上国の近代化に役立てたいという発想が強かったわけです。一九六〇年の安保改定の直後ぐらいに箱根で国際会議があって、日本側とアメリカ側が議論するわけですが、そこに丸山さんも出席していました。

つまり、丸山さんとアメリカ文化との関係を検討する場合には、第一に、『思想の科学』を中心とした知米派知識人との交流の問題、第二に、近代政治学との議論、第三に、「近代化論」の受けとめ方が手がかりになると思います。

## Ⅱ　戦前の丸山眞男とアメリカ文化

丸山さんの父、丸山幹治は、アメリカに駐在したこともある知米派のジャーナリストでしたので、父親の影響もあったし、父親の友人であった長谷川如是閑もアメリカについてはずいぶん詳しい方だったので、そういう戦前からアメリカについての文化的影響は受けていたと思います。同時に、丸山さんはドイツ語が中心的な外国語だったようですが、英語も得意で、英語で詩を書いたりしていますし、アメリカの映画も大好きだったと聞いておりますので、戦前からアメリカ的な文化に対する関心は持っていたと思いますが、それでも学問的には何といってもドイツが中心であったと思います。

例えば、丸山さんは、一九三七年に東大法学部の助手に採用されたときに、友人からお祝いとしてメリアムの本をもらった時の印象をこう書いています。「政治学といっても、アメリカ政治でなく、ラスキやなんかは別として、むしろドイツの国家論が主ですけれど、卒業まぎわに、助手になることが決まってから、南原先生の演習で一緒だった友だちに、お祝いということで、メリアムの『ポリティカル・パワー』をもらいました。読んだら難しくて、変な言葉が出てきて、さっぱりわからない。新しいアメリカの政治学というのは、ぼくには、戦前の

ものは、ほとんど入っていないと言っていいでしょうね」[1]と。ですから、丸山さんは、戦前期に大衆文化的なレベルでのアメリカへの関心は持っていたと思いますが、学問的には戦後からアメリカ政治学との格闘が始まったといえると思います。

## Ⅲ 『思想の科学』グループとの交流

戦後の最初の出会いは、『思想の科学』のグループだったと思いますが、鶴見俊輔は、戦場に行っていたので、戦後、復員してきて『思想の科学』という雑誌を出そうという相談を丸山さんに持ちかけたわけです。その折、プラグマティズムの評価をめぐって激論を戦わした[2]といいます。その折、丸山さんは鶴見の主張がよくわからなかったので、ミードやジェームズの本を図書館から借りだし、読んだといいます[3]。そうした違いがあっても、丸山さんは、一九四六年五月に最初の『思想の科学』が創刊されますが、その当初から参加していったわけです。とくに『思想の科学』では刊行の目的として、「思索と実践分野への論理実験的方法の取り入れ」とか、「英米思想の批判的紹介」、「読者と執筆者の生きたコミュニケーションの重視」ということが書かれています[4]。

『思想の科学』は、どちらかというと在野の人々の生活のなかから思想を練り上げていく、そのような志向性の強いグループだったと思います。この点に丸山さんも共感していたようで、こう語っています。

「現在問題になっているようなイデオロギー――例えば自由主義とか共産主義とか社会民主主義とかいうような―は思想としていずれも舶来であり、日本人が自ら生活体験のなかから生み出して行ったものではない。民主主義がアメリカ人にとって、所謂Way of Lifeになっているのとちがって、日本人の日常生活様式と、こういういろいろなイデオロギーとは実はまだほとんど無媒介に併存しているにとどまる・・・中略・・・僕は少なくも政治的判断において高度のプラグマティストでありたい。だからいかなる政治的イデオロギーにせよ、政治的＝社会的諸勢力にせよ、内在的先天的に絶対真理を容認せず、その具体的な政治状況における具体的な役割によって是非の判断を下すのだ[5]」。

つまり、丸山さんによると、日本では自由主義にしても社会主義にしても、みんな外国からの輸入品であり、日本人が自ら生活体験のなかから生み出して行ったものではない。その点を一つの反省として自覚し、日本人の生活のなかから思想を練り直さなきゃいけない、戦後民主主義というのはそのようなものだと、丸山さんは考えたのだろうと思います。この発想は、『思想の科学』のグループと非常に共通するものであったのではないかと思います。ただし、しばしば、鶴見俊輔とは「大衆文化」やアカデミズムの評価をめぐって論争もしたようですので、評価の対立もあったわけですが、生活のなかから思想を形成してゆくという考え方では両者は一致していたのではないかと思います。

## Ⅳ　アメリカ流近代政治学の受容とマッカーシズム批判

次に近代政治学との関係ですが一九四六年五月の雑誌『世界』に「超国家主義の論理と心理」という論文を発表したときに、戦前の軍部独裁的な体制の精神構造を研究するという点に丸山さんの新しさがあって、マスコミも注目したと思いますが、この論文の背景的な説明を一九六四年の追記で、それは必ずしもアメリカの政治学の影響によるものではないと次のようにいっています。

「・・・こうした精神構造からのアプローチがひどく新鮮なものに映じたわけである。こういう角度で分析を試みるにあたって、私は『お手本』がなかったので、（アメリカの社会心理学や政治学の象徴論やコミュニケーション論は当時の私には殆ど全く未知であった）いろいろ苦労してあまりスマートでない表現や範疇を『鋳造』せねばならなかった」と。[6]

つまり、一九四六年の時点では、かなり丸山さん独自というか、マンハイムなどの影響もあると思いますが、必ずしもアメリカ政治学の影響であのような論文を書いたわけではないと思います。一九四九年の一〇月に『社会科学入門』という本が出され、政治学の入門を丸山さんが書いていますが、四九年の時点では、アメリカの政治学というのはテクノクラティックな考察が多くて、権力とか暴力の側面というのは非常に軽いか、無視されているということで、むしろ批判的なコメントをしていました。[7]

ところがこの同じ本が一九五六年に出るわけですが、ここでも丸山さんが政治学入門を書いており、社会科学として政治学を確立させる必要性がある点を強調され、イーストンの *Political System*, 1953. などを詳しく紹介しています。近代政治学の行動主義的なアプローチというものが、二〇世紀初めの市民的デモクラシーの変質に対応しているもので、「古典的民主政のノーマルな循環に対する攪乱的要因」の均衡条件を探求するものだと、非常に肯定的に紹介をし、日本のマルクス主義者に近代政治学の問題提起の理解を促していました。[8]

このように一九四九年から五六年の間、つまり、五〇年代の前半期に丸山さんはアメリカ政治学に対する理解を急速に深めていったといえるのではないかと思います。

ところが、同じ時期のアメリカは、マッカーシズムといわれる「赤狩り」が吹き荒れた時代で、丸山さんも親しくしていたE・H・ノーマンというカナダの外交官がアメリカ議会の「赤狩り」の標的になって、一九五七年四月に外交官としてエジプト駐在中に自殺をするという悲劇が起こっています。それ故、アメリカ政治学を一方で評価しつつも、マッカーシズムのような現象が発生するアメリカに対しては厳しく批判するという非常に両義的な姿勢をとっていたのではないでしょうか。

例えば、一九五二年に発表した「ファシズムの諸問題」では、米国の「赤狩り」や黒人排斥の最前線に立っている各種反動団体やそれに

動員されている小市民の行動様式がドイツやイタリアに類似していると指摘しています。しかし、興味深いのは、マッカーシズムのような「赤狩り」が起こって、アメリカの社会体制全体がファシズムになるかという問いに対して、組織労働などの自発的結社の抵抗力を評価して、米国でファシズムが体制化する可能性に対しては否定的な見解を述べていました。また、一九五四年に発表した「ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」では、戦後のファシズムが「国際的反革命の総本山となった米国の内政におけるマッカーシー主義と従属地域での国内消費用のファシズムとの関連として把握する視点を出しつつも、有効な抵抗手段として、「民衆のあいだに自発的な・・・小集団が形成され、相互間に自主的なコミュニケーションが活発におこなわれること」[9]を重視して、それがファシズムに対する抵抗になるだろう、と指摘しました。

つまり、アメリカのなかにある、ある種のボランタリズムというものがファシズム化を防ぐ重要な契機になるという点も指摘していました。それ故、一九五〇年代におけるアメリカ政治学の受容という点とマッカーシズム批判という、両義的なアメリカ像というものを丸山さんは持っていたと思います。

## V　アメリカ流「近代化論」との論争

次に一九六〇年代に入ると、「近代化論」が日本でも注目されるようになりますが、その背景を調べると、大変興味深い事実が発見されます。米ソの冷戦が非常に激しくなるなかで、アメリカ的な自由主義を世界に広めようと、「文化自由会議」というものが一九五〇年にシドニー・フックとかアーサー・シュレジンガー・ジュニアなどによって結成されます。そして西ベルリンに行って、「自由の尊さ」を宣伝した後、一九五一年にインドに行きましたが、当時、ネルーのインドは非常に中立志向が強いし、植民地から離脱して経済発展するためには社会主義的なシステムのほうがいいということで、中立主義と社会主義に対する傾斜を非常に強めていたことを発見するわけです。そこで欧米の自由主義的な知識人は、中立主義は「不道徳的」だといって説教をしたわけですが、インド側は全く受け付けないで、むしろアメリカ的な自由主義に対する反発を強めたという結果に終わりました。そこで、アメリカ側は、なんとか途上国を自由主義的な方向へ発展させる途を示さなければいけないと考えたわけです。このインド・ショックが大変大きく作用して、「近代化論」の開発が始まるわけです。[10]

もう一つの契機は、ロシア研究でした。コロンビアとかハーバード大学にロシア研究センターが発足して、そこでロシア革命ではない発展の道の探究が始まったわけです。資本主義的なロシアの発展の可能性はなかったのかという観点から、やはり「近代化論」が登場してくるわけです。

とくに米国の日本研究者の間でこれが積極的に受けとめられて、ジョン・ホールとか、マリウス・ジャンセンといった人々が一九五八

年にアメリカのアジア学会のもとにフォード財団の助成を得て、「近代日本研究会議」を発足させています。明治以来の日本の発展を発展途上国の「近代化」モデルと位置付けて研究を始めたわけですが、その準備会議として一九六〇年八月末から九月初めにかけて箱根で国際会議が開催されました。そこにはベンジャミン・シュウォルツとか、エドウィン・ライシャワーとか、イギリスからロナルド・ドーアのような有名な日本研究者が集結しましたし、日本側は非常に多彩な顔ぶれでした。丸山さんとか、川島武宜、大内力とか、大来佐武郎、猪木正道、遠山茂樹、加藤周一、古島敏雄といった、いわゆる近代主義者だけではなくて、講座派や労農派につながるマルクス主義者も参加していたのです。ですから、日米間の議論はいろいろな興味深い論点に及びました。

ここで、ジョン・ホールが基調報告的な問題提起をしたのですが、そこでは特定のイデオロギーとか、西洋モデルにとらわれないような「オープン・アプローチ＝開放的接近法」が必要だということで、「近代化」の九つの指標を提起したわけです。それは都市化だとか、識字率とか、所得上昇、移動性の向上、商品化・工業化、マスメディアの発達、社会参加、官僚制化、環境への合理的対応といった九つの指標で、日本も分析するし、発展途上国についても分析しようとしました。そのような一見ニュートラルな指標が出されたわけですが、この場合、日本に適用すると、だいたいプラスのイメージが出てくるわけです。工業化なども戦前から進んでいたわけですので、プラスのイメージが出てくるわけです。ところが日本側は、戦争が終わってまだ一五年しか経ってないわけですから、なぜ日本があのような軍部独裁的な体制のもとで無謀な戦争に突入したのかという、原因のほうにむしろ当然関心を持って報告したわけです。

つまり、アメリカ側は、戦前の日本の近代をプラスにイメージして、それを途上国に当てはめようという発想でしたが、日本側は何で日本では軍部独裁や太平洋戦争に突入したのかという関心から、明治維新以来の近代にはネガティブな面があるというアプローチをしましたから、まるっきり水と油なわけです。それ故、なかなか議論がかみ合わなかったのが実態だったと思います。その折に面白かったのは、制度がいくら近代化されても精神が前近代的なままであることがあり得るのだという丸山さんの主張でした。だから、近代化を議論するためには価値観（value-system）のような問題をとりあげなければいけないという問題提起をしていました。当然、近代化と同時に民主化、デモクラタイゼーションというものも考えなきゃいけないと日本側が強くいったのですが、アメリカ側は、民主化という指標はなかなか経験的なデータで論証するのは難しいという反論をして、とりあげなかったのです。ですから、結局アメリカ側は、部分的な修正はしましたが、数量的なかたちで評価できるような指標に固執して「近代化論」を展開していくことになりました。[11]

このグループは、アメリカに戻ってから、五回ぐらいのセミナーを開いて五巻本ぐらいの本を出しています。そのうちの第一巻がジャン

セン編の『日本における近代化の問題』というもので、このなかに日本人では丸山さんの論文だけが載っています。基本的にこの「近代化論」のグループとは、ドーアのようなイギリス人も若干含まれていますが、基本的にはアメリカの日本専門家による論文集なので、そこに丸山さんがひとり入ったのは大変興味深いことでした。これは一九六二年一月にバミューダで第一回近代化会議が開催されるわけですが、そのときちょうど丸山さんはアメリカに滞在していたわけです。そしてその一九六二年四月の全米のアジア学会で報告をしているのです。その報告に基づいた論文、「個人析出のさまざまなパターン―近代日本をケースとして―」という論文が、このジャンセン編の本に収録されることになったわけです。

そこで丸山さんは、個人の価値観というものを自立化・民主化・プライバタイゼーション、私化・原子化という四つのパターンに分けて分析しています。つまり、近代化と個人の価値観の変化というものは、非常に不可分の関係にあると考えて、個人の思想的な変化を追っているわけです。徳川時代の伝統的な紐帯というものは、個人の自立を妨げる、抑制する側面があるという面を強調したのですが、アメリカ側の研究者は、徳川時代から識字率が高いとか、勤勉で倹約な精神が普及していたという面を強調して、近代化の芽は徳川時代から始まっていたと主張しました。

つまり、丸山さんの徳川時代の理解とアメリカ側の理解では非常に対立したわけです。この対立は、すでに一九五〇年代末に、ロバート・ベラーというアメリカの宗教社会学者が書いた *Tokugawa Religion*, 1957.（邦訳『日本近代化と宗教倫理』未来社、一九六六年）という本の非常に詳細な書評を、丸山さんが一九五八年の『国家学会雑誌』に書いている中にも表れていました。この本で、ベラーは、Max Weberのテーゼを応用してヨーロッパで資本主義が発達する基礎にプロテスタンティズムの倫理があるのと同じように、徳川時代の日本にも何らかのそのようなエートスがあったのではないかということで、儒教に経世救民の思想があったこと、石田梅巌の心学が職業倫理の向上などに効果があったとして、徳川時代から近代化の芽があったと主張したわけです。

ところが丸山さんは、この本を「アメリカの日本研究書のなかで私の貪欲と『闘志』をかき立てた久しぶりの労作」と評価しながらも、日本における儒教や仏教の流入が普遍主義の弱まりを招いたこと、官僚化過程がもつ家父長的な契機の軽視があると批判しました。[12] しかし、ベラーは、一九六二年四月の米国アジア学会の報告で、「私の徳川日本の研究は、伝統社会に対してやや楽観的な接近法をとり、伝統的な日本の制度がある状況のもとで経済発展にとって好都合になる範囲、あるいはなりうる範囲を強調した。私はそうするに当たって、日本におけるいくつかの『合理化』の側面とウェーバーが西欧について語っている合理化との間に多くの平行関係を推定した。『国家学会雑誌』一九五八年四月号で丸山眞男の書評が鋭く批判したのは、まさしくこの点であった。彼は、私の論じた多くの機構―例えば天皇への忠誠心

の集中――が経済成長を促進するような社会変化があったことを否定しないで、それらはウェーバーの意味では全く合理的ではなく、むしろ後の日本の発展に深く非合理的な影響をもたらした・・・ことを指摘している[13]」と自己批判し、丸山さんの批判を受け入れました。

## Ⅵ　ベトナム戦争と修正近代化論、近代化論否定の台頭

このように、この近代化をめぐる議論のなかで、丸山さんが提起した近代化と民主化が不可分である点とか、個人の思想的変化を抜きに近代化を論じることはできない、といった論点は、アメリカ側が後に受け入れていくというところが非常に面白いところだと思います。この背景には、アメリカ側のベトナム戦争体験があったと私は思っています。ベトナム戦争を体験するなかで、近代化論はその楽観的基調を改め、「修正近代化論」が登場することになりました。この理論では、近代化で工業化とか経済成長が進んでも、実際には独裁政権が登場することが歴史上には多々あるということを認めるようになったのです。

そのような点を強調したのが、バーリントン・ムーアの『独裁と民主政治の社会的起源』という、原著は一九六六年に出ていますが、このなかで、ムーアは、二・二六事件のことを分析した本として丸山さんの本を引用しています。二・二六事件というのは「下からのファシズム」が失敗して「上からのファシズム」が始まったのだという、その丸山さんの分析をムーアはこう紹介しています。

「ある透徹した日本分析によれば、この計画的クーデターの失敗は、基本的に反資本主義的で大衆的な右翼による『下からのファシズム』の挫折を意味しており、代わって『上からのファシズム』が登場したという[14]」。

丸山さんの『現代政治の思想と行動』の英訳が一九六三年に出ていますが、ムーアはそれを読んで丸山説を日本の戦前体制の分析に採用したと思われます。

それからベトナム戦争は、アメリカ人にとってみると、国論を二分する深刻な体験であったわけですが、とくに若い大学院生で、アジアを研究している人たちは、軍の委託研究のようなものに協力させられていたので、一層深刻でした。例えば、ハーバード大学に東アジア研究所がありますが、その研究所に二名のＣＩＡ要員が研究生として入ってるということが暴露され、大問題になりました。そのようにベトナム戦争に大学も協力させられてる現実に対して、若い研究者たちが批判の声を上げて、一九六八年三月には五〇〇人のアジア研究者がベトナム戦争への協力を拒否する声明を発表しました。このような動きが、「憂慮するアジア研究者委員会（ＣＣＡＳ）」の結成につながっていきます。ここには、ジョン・ダワーとか、マーク・セルデンとか、今日、日本でも有名なアジア史研究者が参加していったわけであります[15]。

つまり、アメリカのアジア研究では、ベトナム戦争を契機として「近

代化論」のような楽天的な発展モデルに対する強烈な批判が高まっていったわけです。その結果、興味深いことに、E・H・ノーマンという冷戦時代のアメリカではタブー視されて、ほとんど若い院生たちは大学の講義で紹介されなかった人物の著作を再発見することになるわけです。しかも、そのきっかけをつくったのは、丸山さんのノーマン追悼文が英訳されて、アメリカの雑誌に載っていた、それを若い院生たちが読んでノーマンを発見するという流れがあったわけです。[16]

しかし、このようなノーマン復権に関して、丸山さんは、一九七三年六月に渡米し、プリンストン大とハーヴァード大で名誉博士号を授与された際に、次のような辛口のコメントをしていました。「ノーマンをマルクス主義の方にひきつけて解釈する日本の歴史家のイメージが戦争直後のアメリカ学者に引き継がれ、そこでステロ化されたノーマン像がアメリカの日本学者の間にできた。・・・ギボンのローマ史とか、イギリス史学のスタイルとか、ノーマンの教養的な背景をもすくい上げたうえでの位置づけになっていないのではないか。・・・率直にいってアメリカにおけるマルクス史学の『若さ』に制約されている、といいたい」。[17]

このような近代化論批判の高まりを受けて、「近代化論」の提唱者であるジョン・ホールは、一九六八年三月のアメリカのアジア学会での講演のなかで、近代化に関する「没価値的概念」を提出したが、「我々の研究には暴力、革命、階級、イデオロギー等々の要素が欠落」していたと、自己批判をすることになったわけです。[18]

つまり、アメリカでは、「近代化論」そのものがベトナム戦争体験を通じて修正され、「修正近代化論」にかわっていったり、近代化論の否定論が台頭したと思いますが、この過程に大きなインパクトを与えたのがベトナム戦争でしたが、丸山さんの「近代化論」批判も、ひとつの修正を迫る重要な知的刺激になっていたと思います。

## Ⅶ　結び

最後に、「結び」ですが、丸山さんにとってのアメリカ文化は、先ほどもいったように、非常に両義的だったと思います。アメリカ流の工業化一辺倒の「近代化論」に対しては批判的で、価値観の変容や民主化の要素をとり入れるように主張しており、それがアメリカ側にも受け入れられていったと思います。しかし、同時に、大衆消費社会化の評価は丸山さんにとっては遺された課題になったと思います。この大衆消費社会化は、すでにアメリカでは一九二〇年代ぐらいから始まっていましたが、日本の場合は一九五〇年代半ばぐらいから高度経済成長期に進行して行くわけです。この大衆消費社会化というものを、丸山さんがどのように受け止めたのかという点は、私などは大変知りたいところですが、残念ながら丸山さんは一九六〇年代の半ばぐらいから自分の研究を東アジア政治思想研究という、歴史研究のほうに集中していったためでしょうか、政治学的な現状分析についてはされなくなっていった面が強いので、丸山さん自身が大衆消費社会化をどう

いうふうに受け止めたのか、丸山さんが重視した「自立した市民」の育成ということが大衆消費社会ではどうなったのか、という点は未回答のまま終わった印象があります。先ほど苅部さんの話にもあったように、豊かさのなかに個人が埋没してしまうとか、情報社会化のなかでマスメディアに踊らされていくとか、文化が画一的になっていくとか、様々な新しい条件のもとで、「自立した市民」をどうやって育成できるのか、という問題が残されていると思いますが、それは残されたわれわれの宿題になっていると、私は思います。

丸山さんは、つねに「永久革命としての民主主義」ということをいっていましたが、現在の日本社会が依然として後進的だと感じるだけに、丸山さんの遺言はなお光を失ってはいないと思います。例えば、三・一一後の原発の事故をみても、スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故があって、日本でも起りかねないという警告が散々出ていたにも拘わらず、原発を推進する「原子力ムラ」の人々はそういう批判を受け付けなかったわけです。日本の場合、権力の中枢にある人は、周りにイエスマンばかりを置いて、外部からの批判を受け付けない体質が牢固としてあるように思います。そのような日本社会の後進性、非民主性というものは依然として解決されてないので、丸山さんのいう「自立した市民」の育成という課題は依然として未達成だと思います。

注

（1）『丸山眞男回顧談』上、一五八頁。

（2）安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」が遺したもの』久山社、一九九二年、二〇二頁。

（3）鶴見俊輔『たまたまこの世界に生まれて』SURE、二〇〇七年、三三頁。

（4）安田ほか、前掲書、二一三―五頁。

（5）丸山眞男「ある自由主義者への手紙」『現代政治の思想と行動・増補版』未来社、一九六四年、一三六―七、一四九頁。

（6）同上書、四九五頁。

（7）丸山眞男『戦中と戦後の間』みすず書房、一九七六年、四四三頁。

（8）丸山ほか『社会科学入門』みすず書房、一九五六年、二一、二五―六頁。

（9）丸山、『現代政治の思想と行動・増補版』、二六〇、二六四、三〇三頁。

（10）B・J・バーンステイン編『ニューレフトのアメリカ史像』東京大学出版会、一九七二年、二六六、二七三頁。

（11）『箱根会議議事録』一九六一年四月（丸山文庫所蔵）。

（12）ロバート・ベラー、堀一郎・池田昭訳『日本近代化と宗教倫理』未来社、一九六六年、一六六、二五〇、三五一、三五四頁。

（13）ロバート・ベラー『社会変革と宗教倫理』未来社、一九七一年、九七頁。

（14）バーリントン・ムーア『独裁と民主政治の社会的起源』岩波書店、一九八六年、上、三五八頁。

（15）金原左門『日本近代化論の歴史像』中央大学出版部、一九八六年、三一九頁。

（16）John Dower ed., *Origins of the Modern Japanese State: Selected Writings of E.H.Norman*, Pantheon Books, 1975, p.32.『思想』一九七七年四月ノーマン特集所収、ダワー論文、一二一頁。

（17）丸山眞男『思想』一九七七年四月、二五七―八頁。

（18）ジョン・ホール『中央公論』一九六九年一月。

参考文献

丸山眞男「語りつぐ戦後史」『思想の科学』一九六七年五月。

丸山眞男『自由について』ＳＵＲＥ、二〇〇五年。
アキタ、ジョージ「英語圏における近代日本政治研究」『国家学会雑誌』一九六九年。
石田雄『丸山眞男との対話』みすず書房、二〇〇五年。
苅部直『丸山眞男―リベラリストの肖像―』岩波新書、二〇〇六年。
金原左門『近代化論の転回と歴史叙述』中央大学出版部、一九九九年。
コッシュマン、ビクター「知識人と政治」アンドリュー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』下、みすず書房、二〇〇一年。
清水靖久「丸山眞男と米国」『法政研究』七四―四、二〇〇八年三月。
竹内洋『丸山眞男の時代』中公新書、二〇〇五年。
西谷啓治ほか『戦後日本精神史』基督教学徒兄弟団、一九六二年。
ハイン、ローラ『理性ある人びと、力ある言葉』岩波書店、二〇〇七年。
バーシェイ、アンドリュー『近代日本の社会科学―丸山眞男と宇野弘蔵の射程―』ＮＴＴ出版、二〇〇七年。
松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』上・下、岩波書店、二〇〇六年。
吉本隆明「丸山眞男論」『吉本隆明著作集』勁草書房、一九六九年。

Kersten, Rikki, *Democracy in Postwar Japan; Maruyma Masao and the Search for Autonomy*, Routledge, 1996.
Koschmann, Victor, *Revolution and Subjectivity in Postwar Japan*, University of Chicago Press, 1996.
Matsuzawa, Hiroaki, "Japanese Social Sciences and Theories and the USA: Focusing on Maruyama Msao", March 28, 1997.

【終】